

田中澄江

花ぐるま

続



花ぐるま

続

田中澄江

講談社

花ぐるま 続

昭和四十九年九月十六日 第一刷発行
昭和五十年二月八日 第四刷発行

著 者 田中澄江

發行者 野間省一

發行所 株式会社講談社

東京部文京区音羽二―二二二／郵便番号 一一二
電話 東京 (〇三) 九四五―二二二(六代表)／振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はおとり替えます。
© 田中澄江 一九七四

花ぐるま続
目次

われもこうの章

7

ほととぎすの章

32

おみなえしの章

51

野菊の章

79

草紅葉の章

106

やどりぎの章

131

ふゆのはなわらびの章

152

撫子の章

177

おだまきの章

195

あかねの章

217

ふたりしずかの章

238

装幀・カット
三田恭子

花
ぐ
る
ま
続

われもここの章

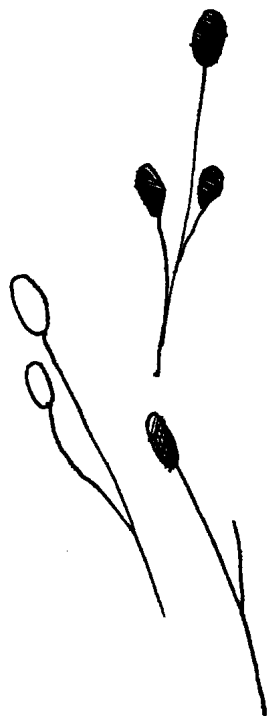
大阪市の北、都島区的那の家を見つけたのは、一鉢のわれもここの草かもしれない。

われもここの草

すすきかるかや秋くさの

さびしき極み

君におくらむ



若山牧水のこの歌を、高校の図書室の歌集の中から見つけ出して、心ひかれた。

われもこうは華やかな花弁もなくて、実のような、濃い紅紫の小さい花が、一メートルほどの草茎の頭にかたまつて咲く。

八月も終り頃になると、芹生の谷間の道のほとりに、秋のいろどりをそえた。

花江は花の中でもとりわけて、野の花が好きだけれど、殊に目立たぬようできて、深い花の味わいを見せるものを好んだ。

春ならば谷間の斜面にうす紅の花冠をひっそりとうつむけて咲くかたくり。夏は、河原の夕闇にほの白く浮ぶおおまつよいぐさ。秋は草むらの中に空の青を映して鮮やかなりんどう。そして一番地味なよそおいの、われもこうが好ましい。

お母さんのふるさとの隠岐の島に移った工藤先生から、根のついたままのわれもこうをおくられてから、その花は更に忘れ難いものになっていた。

京の都、千年の歴史をとかつて今日も流れつづける加茂川の水。

その上流の貴船川の谷を越え、分水嶺の芹生峠を下った芹生の里で、花江は水城家の長女として、高校までの月日をすごした。

いまは北桑田郡京北町に併せられた芹生は歌舞伎で名高い、「菅原伝授手習鑑」の、寺子屋のあった場所だと言われている。

生まれて十七歳のその日まで、両親やきょうだいにこまれて、貧しいながらあたたかい家庭に育った花江は、ある日、谷あいの川のほとりで、同級生の佐山かつ子から、棄て児だと言われた。

「うちが棄て児？　だれがそないなうわさを？」

「知らへん」

この里で指折りの山持ちの娘であるかつ子は、自分の一言が、友人の心を深く傷つけたことも知らぬ風で、杉木立の中を走り去っていった。

あるいは花江へのねたみであったろうか。

佐山家と並んで山持ちの竹田家の吾郎は、分教場に共に学ぶ頃から花江とよく話しあい、京北町にある高校へのゆき帰りにもよく一緒であった。

性格も男らしく快活な吾郎は、クラスの女の子たちの人气的であり、かつ子は、何かの機会を見ては吾郎と近づきたがったが、吾郎は、花江以外の女友だちは近づけようとしなかった。花江と吾郎は初恋びと同志で、いまに結婚するのであろう。

芹生育ちの友人たちは折にふれてうわさし、めんとむかってひやかすものもいた。かつ子にとっては、吾郎と花江の親しさがねたましさを越えて、憎しみをよぶものとなったらしい。

通学の途次で、学校の校庭で、また、バスの中の、大ぜいのひとの前であってさえ、何かと花江に意地悪いからかい言葉を浴びせた。

どんな悪意を示されても、溪川の流れが、岩にあたってくだけながら下流にむかって流れ進んでゆくように、花江は、意地悪い友の言葉を平気で受け流す事ができた。しかし、棄て児という一言だけは、鋭く深く胸に刺さった。

吾郎の母からはもらい子だと聞かされた。

そして、他のきょうだいたちと、何のわけへだてもない、決して棄て児でももらい子でもないと言いきった両親の許に、ある日、もとは祇園の芸妓であった中尾君子、京の木屋町で、「君香」という「お茶漬け屋」を出しているひとが訪れたのである。

生まれてすぐに手渡し、その家の子として届け出た花江を、自分の養女にもらい受けたいと願って。

芹生分教場の工藤先生は、京都の国立大学に在学中、学徒動員で出征し、南方の島から帰還した。敗戦後は、芹生の山奥深くこもって、子供たち相手の生活をつづけている。

隠岐の島生まれの母親と二人きり、結婚もしないで、村びとのために、あるときは小・中学の教師となり、あるときは近くの菅原道真を祭る天神様の神主となり、病人があれば、臨時の医者や看護人ともなった。

実の母の許に引きとられた方がよいか、あくまでも芹生の育ての親との暮らしを大事にするか。工藤先生は思い悩む花江をやさしくさとした。

水は低きについて流れ流れていっても、水そのものの本質は変らない。水の流れのように、

素直に、与えられた運命を享けてみたら。

京で過した二年目の夏、隣りの山城屋菓子店の息子孝吉が、結婚して千本通りの新らしい店にうつると、そのあとは旅館になり、アメリカの西部、カリフォルニアから帰ったばかりという南ゆき子が住むことになった。

ゆき子は西欧ものの舞台の女優のように、髪の毛を茶褐色に染め、片言にアメリカ語をふんだんに使う女である。

はじめて引越しの挨拶を受けたときは母の君子も花江もあまりの異様さにびっくりした。しかし生まれは京の岡崎だという。

「純綿、百パーセントの日本人どすわ。戦争中は白鉢巻きして、兵隊さんの軍服のえりかざりつくる工場に勤勞奉仕でかけていました」

まぎれもないヤマトナデシコが、異国の女の真似をして、赤毛のかつらに、赤毛のマスカラなどをつけるのは、女手で、旅館を経営する自己防衛策であるという。

「日本の男のひとは、外人の女といえ、大事にしてくれはりますわ。電車の中でも、フランス人かアメリカ人などと言われて、席をたってくださいます」

アメリカ風というのであろうか、こだわりもなく言いたいことを言っただけ、やりたいことはどんどん実行する。

花江が、加茂川の土手であつて来たひるがおの花を、鉢に植えて二階の窓に並べてあるのを隣の窓越しに見ておもしろいと言ひ、花江の部屋に入つて、その野の花の姿を眺めに來た。

「朝顔いうのはだれも植えますけれど、屋顔をわざわざ植えて育てるとはおもしろい趣向ですなあ」

感心しながら、南は、花江の部屋を一わたり見まわし、額に入っている杉木立の写真に眼をとめた。

「この杉は北山の？」

「はい。芹生の谷間の景色です」

「芹生？」

かん高い声の調子が低くなつた。

「知つといやすか？　うちが育つたところどす」

「では小学校もそこで？」

「はい。分教場の工藤先生に教えてもらいました」

「工藤？」

「武夫先生どす。いい先生やつた……」

「その先生……結婚してはりますか？」

その気配もなく、お母さんと二人きりだと聞いて、南の眼がうるんだ。

「一度つれてつてくれへん？ 芹生に」

「はい。よろこんで」

芹生の谷は北山杉の産地として知られている。天にむかつてそそりたつような、その美しい杉林を見にゆくのならいつでもお伴するという花江の声に南の顔が明るく冴えた。

その夜、客の帰ったあとの店に来て、工藤先生に手紙を書いてほしいと花江にたのんだ。「戦争がなかったら、うちは工藤夫人になっていたかも知れへんのどす」

あまりの意外さに息をのむ君子や花江に、南はこの十何年の月日をへだてて、日本の運命が大きく変ったように、二人の若い恋びと同志の上を襲った過酷な運命を告げた。

親同志からも祝福されて、工藤先生が大学を卒業したらと乙女心はずませていたのに、青年は戦場に駆りたてられていった。

娘は高槻の工場に通勤し、空襲警報が頻発する不安の中に、妻子ある工場の幹部に犯されてしまった。

戦争が終ったとき、京の町にもおびただしい異国の兵たちが、進駐という名の下にやって来て、娘は、そのうちの一人の将校と恋愛し、彼の帰国に際して、結婚の手つづきを経て渡米した。「あのひとが南方から帰る前どした……。もうあのひとには合わす顔がないと思うて……」

戦後処理という異常事態の中での国際結婚は、実際の異国の生活の中に入って、早くも大きな亀裂を見せた。

離婚した彼の妻との間には子供があり、風俗習慣のちがう国土で、言葉も不自由なままに、異邦人にとりまかれた暮しをつづけているうちに、南は望郷の念に耐えかねて、軽いうつ状態になった。

彼は別れた妻との間に交情を復活させ、まとまった慰藉料を与えられて、日本人妻は帰国した。

「それで？ 先生と結婚しはるんどすか？」

君子が、いたましやうに眉をひそめて聞いた。

「そないなムシのええこと考えてしまへん……ぼろぼろの雑巾のようにくたび果てた女どすわ」

「でも先生はあんさんを待つてはるのかもしれまへんなあ」

「工藤さんの学生時代の友人から手紙もろうて……もう女はこりごりやいうていると知らされたことがあります。こちらがあいたいと思うても、あちらは逃げるかもしれまへんなあ」

しかし、工藤武夫の健在であることを知っただけでも、日本に帰って来た甲斐があると、南は生き生きと声をはずませた。

十何年とたつて、ふたたび恋しいひとに巡りあえるとよろこぶ南の前に、花江は深く心につぶやいていた。

（自分の本当の父は二十年近くたって、まだどこにいても知らされていない）